被災地支援に取り組む宗教 NGO

おやさと研究所准教授
野口　茂　*Shigeru Noguchi*

2011 年 3 月 11 日、東日本大震災のその日、私はフィールド調査のために南米のベネズエラにいた。日本から 13 時間半遅い時差の関係で、現地のテレビでは 11 日早朝から、東北各地を襲った生々しい津波の映像が繰り返し映し出されていた。「これは CG 映像ではないか…」遙か 1 万 4 千キロ離れた地でも、その映像の凄まじさに誰もが言葉を失っていた。その後現地での滞在中は、遠く異国の震災にもかかわらず、本当に多くの方々からお悔やみの言葉をかけていただいた。全く見ず知らずの人でさえ、私が日本人だとわかると、友人や家族の安否を気遣ってくれた。

そうした大勢の方々からのお見舞いや励まし、祈りの言葉を受けながらも、いざ帰国してみると、目先の仕事に追われ身動きがとれない日々が続いた。被災地へは多くのボランティアが駆けつけ、さまざまな活動に奔走している。「いったい自分には何ができるのか」もどかしさや自責の念が交錯するなか、天理教教会本部として「災害救援募金」が実施されていることを知り、精一杯の思いを込めて募金箱へ向かわせていただいた。また、同じ信仰信念に基づいて、被災地で懸命に活動する災害救援ひのきしん隊（災救隊）の方々にこの思いを託したい、そんな祈りに似た気持ちでもあった。

そしてその時にふと、これが、国内にいながら途上国の支援活動に携わる方々の気持ちではないか、と気付いた。私はこれまで本連載を進めるにあたり、多くの宗教 NGO を訪ね、関係者の方々にお話を伺ってきた。その場で、いつも必ず口にしたのが、「なぜ皆さんは、こうした活動に参加しているのですか」といった質問だった。しかしこの度の震災を受けて、さまざまな形で支援に取り組む人々に、はたして誰がこのような質問を発せられただろうか。私自身の心の中では、無意識のうちに人の苦難を宗教や国境というもので選別していたのではないか。また、参与観察での中立性の確保や客観性といった立場に固執するがあまり、どれだけ支援者の方々の心を乱してきたのかと、今さらながら深く反省させられた。

被災地に駆けつける宗教 NGO

震災の発生直後に、どの政府機関よりもいち早く被災地に駆けつけ、自力で救援活動を始めたのが、常時災害救援に取り組む国際 NGO だったと言われている。その後、多くの民間ボランティアが現地入りしたが、本連載でもすでに取り上げたシャンティ国際ボランティア会（SVA）の動きをここでは紹介したい。

SVA は 1981 年に曹洞宗が母体となって誕生した、国内有数の教育協力 NGO である。アジアの国々を主な拠点に、図書館事業や学校建設といった教育・文化活動を展開する一方、国内外でこれまでに 20 以上の災害救援を行ってきた実績を持つ。今回も通信や交通網が寸断され情報が錯綜するなか、3 月 14 日には関係者が現地に入り、被災状況の把握とニーズの調査に努めた。

もともと被災地の東北は曹洞宗の寺院が多い地域であり、さらに 30 年前に始まったカンボジア難民支援に深く携わった協力者が多く暮らす、SVA にとって縁深い地域であった。「この機会になんとか恩返しを」そんな思いが、さらに組織の士気を高めた。しかし当然のことながら、公益社団法人として認可を受けている SVA には、被災寺院や関係者のみに支援を集中させることはできなかった。そうしたある種のジレンマを抱えながらも、関係寺院や地域のボランティアセンターと連携して、炊き出しや生活物資の配布等、被災者に寄り添うかたちでさまざまな緊急救援活動に取り組んでいったのである。

より困難な人とともに

震災後の緊急救援の段階を脱し、やがて長期にわたる復旧・復興支援へと移行すると、一市民組織にとっては相当の覚悟と体力が求められることになる。ニーズの変化や資金的な問題から、活動を撤退せざるを得ない団体が相次ぐからだ。SVA では阪神淡路大震災で 5 年間支援を継続した経験を活かし、今回も 2 年以上の長期にわたる支援を想定。宮城・岩手両県に現地事務所を開設して、現在にいたるまで地域に密着した支援活動を実施してきている。それらは、仮設住宅に移られた方々のための「行茶（ぎょうちゃ）カフェ（茶話会）」や、学生ボランティアによる子供たちへの学習支援、地域イベントへの支援、行政と住民との橋渡し役など、どれも地味だが地域コミュニティの再生・復興にとっては不可欠なものばかりだ。

さらに、SVA の得意分野である図書事業も現在、岩手県内で展開中だという。今回の津波によって、とくに沿岸部に位置する図書館は壊滅的な被害を受け、いまも再開の目処は立っていない。これまで図書館は読書施設としての役割の他に、情報センターやコミュニティセンターとしての機能も果たしていたのだが、図書の流出とともにそうした場も奪われてしまったのである。仮設住宅での孤独死が問題化した、阪神大震災を教訓として活かしたい。そんな思いから、SVA では公的な支援が後回しにされがちな図書事業に着手した。移動図書館車を仮設住宅を中心に巡回させて、さらに映画会、落語、行茶などのイベントを組み入れて、人々が集い憩える場を提供しようと努めているのである。

「地域に根ざした活動により、お互いの信頼関係が生まれる。その中で、心のケアも含めより深い関わり方が可能になるのだろうと思います」と SVA 専務理事の茅野俊幸氏は静かに語る。こうした姿勢は、まさに途上国での支援活動に通底するものであり、そこには力みも焦りも、もちろん国内外の隔たりも宗教の違いも感じられない。ただあるのは「より困難な方々に向き合っていく」という思いだけだ。そしてその思いを共有する全国の支援者たちが祈り、今日も SVA の活動を下支えしている。

（左）小泉中学校校庭応急仮設住宅での茶話会
（右）高田高等学校第二グラウンド仮設住宅での移動図書館（写真提供 SVA）